

再評価のための視点

伊藤 大介 (建築史家・東海大学国際文化学部教授)



伊藤 大介 (いとう・だいすけ)

1956年東京生まれ。東京大学大学院博士課程修了・工学博士。1984～86年フィンランド・ヘルシンキ工科大学に留学。
主な著書に『アールトとフィンランド』(単著、丸善、1990)、『ヘルシンキー森と生きる都市』(共著、市ヶ谷出版社、1997)、『図説年表・西洋建築の様式』(共著、彰国社、1998)、『北歐インテリア・デザイン』(共著、平凡社、2004)、『近代化の波及』(共著、東京大学出版会、2006)、『北欧学のすすめ』(共著、東海大学出版会、2010)、『北欧の建築遺産』(単著、河出書房新社、2010)、『北歐文化事典』(共著、丸善、2017)、など。

①アールトへの向き合い方：本国フィンランドでの変遷

◆アールト晩年の「憂うつ」

フィンランドの建築家アルヴァー・アールトは、1898年2月3日の生まれなので今年が生誕120年となる。1976年5月11日に亡くなっているため、没後で言えば42年である。「120年前」と言えば、その時代にすでに生を受けていた方はほとんどいないだろうが、「42年前」であれば私を含めてその頃のできごとを直接体験した人々がまだいる。

正確に言うと、私が初めてアールトの実作品に現地フィンランドで触れたのは1981年、つまり37年前の夏であった。当時アールト(あるいは広くフィンランド建築全般)にあこがれていた日本の建築学生の私は、初めてのヨーロッパ人旅でまずロンドンの空港に降り立ち、そこから鉄道と船を使ってスコットランド・ノルウェー経由でフィンランドに入

た。そして、ヘルシンキ郊外のオタニエミ工科大学(現・アールト大学)のキャンパスで、学生寮が夏季だけ開放されるサマーホテルに投宿した。これがアールト設計の赤レンガ色の建物であった。私にとって初めてアールトの実物に触れた感激の記憶は、今でも鮮明である。

この時点で、アールトはフィンランドで亡くなってからまだ5年であった。私としては、そのアールトに対する現地の熱気のようなものを大いに期待していたのだが、現実の様子はやや違った。その時も、その3年後から始まった約3年間の私のオタニエミ留学期間中も、接した教授陣や学生仲間たちはアールトに対しては口が重く、多くを語らなかった。「黙して語らず」「敬して遠ざける」といった印象で、不思議な感じを受けたのを今でもよく覚えている。どうも、アールトは扱いが厄介な存在のようだった。

その理由や背景の一端については、ア

ルトと親交のあった美術史家ヨーラン・シルツ著の全3巻のアールト伝記『白い机』(鹿島出版会)で、のちに知った。晩年のアールトを扱った第3巻(原本1989年、田中雅美他による日本語訳1998年)のサブタイトルは「アルヴァ・アールトの栄光と憂うつ」である。戦後のアールトは、その強烈な個性で独自の建築表現をますます際立たせた傑作を残した一方で、社会民主主義路線に傾く戦後フィンランドの建築界から、やや乖離した存在となっていた感がある。彼に心酔した一群の建築家たちがいた一方で、特にオタニエミの建築教育の場に集まった人々の多くはアールトとはっきり距離を置いていた。さらに若い世代の中からも、アールトを公然と批判するような建築家も出現していたのである。

少し見方を変えれば、よくも悪くもアールトへ過剰反応を示す態度は、結局小さな国フィンランドでのアールトという存在の大きさゆえに生み出されたものと言えよう。つまり、当時のこの国の建築家であればアールトを素通りすることは許されず、一度は必ず向き合っただけの反応を示さないでは済まなかったのである。それは熱烈な賛美となることもあったが、場合によっては徹底した反抗的態度の表明ともなった。

公的な場面ではアールトの地位は高まるばかりであった。1943-58年にフィンランド建築家協会(SAFA)会長(1958年以降は名誉会員)、1955年以降はフィンランド・アカデミー会員(1963-68年は会長、1968年以降は名誉会員)となった。しかしその中でも、彼の内心の孤独は深まっていったようである。

◆本人の死から現在まで

アールト本人は1976年に没した。そしてこれをきっかけとして、反対派の人々は口を閉ざして語らなくなった。私の留学した時期は、ちょうどそうした頃に当たっていたのである。

死後のアールトは、むしろ一般社会の中で広く認知された「国家的英雄」への道を歩んだと言えそうである。この国の切手や紙幣の

絵柄に姿が描かれるようになり、そして2010年にはヘルシンキ周辺の工科大学・美術大学・商科大学が統合されてこの国で3番目の規模となり、新しい「アールト大学」の名称で再スタートしたことも大きな話題となった。……これはこれで、喜ばしいことだったのかもしれない。しかし、ものを作る建築家としてのアールトの本当の姿は、むしろ次第に遠くばやけていったように感じてしまうのは私だけではないだろう。

こうした状況からフィンランドの建築家たちが解放されるには、一定の時間が必要だった。私自身がその新しい動きを、「アールト」から離陸した建築家たち-1990年代のフィンランド建築』(『建築文化』1998年3月号)と題してレポートしたこともあった。そして現代では、1960年代や70年代生まれの世代の建築家たちのアールトへの意識はもはや特別なものではないことを、最近出版された『北歐文化事典』(2017年、丸善)で関本竜太が執筆した項目「アルヴァー・アールト以後のフィンランド建築界」が教えてくれる。そこには彼らの言葉として、「アールトは父ではなく祖父のようなものだ。もはや反抗する対象ではない」とか、「アールトの人柄は知らないけれど、彼の空間の思想なら理解できる」といったものが並ぶのである。

今ようやく、客観的な目でアールトを再評価する環境が整ったといえよう。これはフィンランド本国の人々ばかりでなく、遠い日本から熱い視線を注いできたわれわれにしても同じなのかもしれない。

②住宅作品へ

今回の連載では、アールトの建築の中でも特に一連の住宅(基本的に独立住宅)作品をとりあげてゆく予定でいる。

◆日本での受容、そして私にとって

個人所有であるという性格上、独立住宅作品は現地に行っても一般公開されていないものも多い。作品集への掲載も従来は少

なかった。生誕100年に合わせた『建築文化』1998年9・10月号で私が執筆した「アルヴァー・アールト主要作品50撰(Part1/Part2)」に含めることができた住宅作品は10のみで、うち6が独立住宅だった。しかしその後、特に2000年以降であろうか、アールトの住宅は次々と紹介されるようになった。2002年に「アールトの住宅展」の日本巡行があり、16作品が取り上げられた。その中には、初期のタンメカン邸や最晩年の小品オクサラ邸といった従来知られることの少なかった作品も含まれ、これがアールトの住宅作品再評価のきっかけとなったと言えよう。

ヤリ・イエツォネンの『アルヴァ・アールトの住宅-その永遠なるもの』(『a+u』1998年6月臨時増刊、のち2013年にX-Knowledgeより増補版)がこの展覧会企画の原点であった。その後は齋藤裕の美しい写真集『AALTO 10 Selected Houses アールトの住宅』(2008年、TOTO出版)も日本で出版された。従来からマイレア邸は多くのモノグラフなどが刊行されてきたが、今では他の住宅にも広がっている。2016年の東京でのアイノ・アールト展の中で、モダニズム以前の最初期に属するヴィラ・フローラ(最初の妻であり建築家であったアイノの役割も大きい)といった珍しい例も紹介されるまでになったのである。

私個人にとって本格的なアールトの住宅体験は、留学中だった1986年夏のマイレア邸の期間限定一部公開時の初訪問だった。その森の中に埋もれるような立地、内部の流動しながら連続する空間などに圧倒されたことが忘れられない。その後で印象に深いのは、エリサ夫人が亡くなった直後1995年の夏の家(コエ・タロ)の限定公開、そして2000年のヘルシンキのアールト自邸の公開初年度の見学などであろうか。この2つの自邸はまだ整備前の状態だったと言ってよく、その分アールトの生活の匂いが残っているような思いがしたものであった。そして昨年2017年には、ようやく念願のタンメカン邸をエストニア内陸の古都タルトゥに訪ねることができた。



図1 2002年「アールトの住宅」・日本巡回展(解説パンフレットより)



図2 1986年のマイレア邸(筆者撮影)。



図3 1995年の夏の家(筆者撮影)



図4 2000年のアールト自邸(筆者撮影)

③アールトの住宅作品概観： 時代順・タイプ別に

以下では、すでに言及した2002年のアールトの住宅・日本巡回展のためのリーフレットに私が執筆した原稿を下敷きにして、展示された16作品を中心に今回の連載の基盤となるようなアールトの住宅作品全体の概観を行っておこう。

アールトの活動時期は、1920年代から1970年代までの50年以上に及ぶ。多くの公共建築の名作を残す一方で、独立住宅の分野でも約100の作品を設計し、半数近くが実際に建設された。ここではそれを6つに分類して、時期別・タイプ別に説明を加える。(この連載の後編で再論するものは、簡略な説明とした。)

◆建築家としての出発：

北欧古典主義とログ・ハウスの伝統

まずは、ヘルシンキ工科大学建築学科を卒業したアールトが、ユヴァスキュラに戻って最初の設計事務所を開き、地方の建築家としてスタートを切った1920年代半ばの住宅がある。この頃のフィンランドは、ナショナル・ロマンティシズム期が終わり、一方モダニズムはまだ姿を現していない、いわば狭間の北欧古典主義期にあった。アールトも若く、ユヴァスキュラの労働者会館(1924-25)という公共建築の力作もあるものの、労力の多くは設計競技への取り組みや、知人から依頼された小住宅、あるいは改修工事のような仕事に注がれていた。

そうした中で、テルホ・マンネル邸(1923)は例外的な規模をもち、イタリア・ルネサンスの建築家パツァーディオ設計のヴィラが下敷きにされている。一方、ヴェカラの夏の家(1924)ははるかに簡素で、フィンランドのログ・ハウスの伝統に素直に従っている。

◆モダニズムへ：若き日の純粹表現

エストニアの古都タルトゥにあるタンメカン

邸(1932)は、長らく忘れられた存在だったが2000年に修復が完了して知られるようになった。通常のアールト作品のイメージとはかけ離れた、パウハウス並みの純粋なモダニズムの表現が目を引き。この住宅は、代表作のひとつとして知られるパイミオのサナトリウム(1929-33)と時期的に重なる。この頃アールトは、トゥルクに設計事務所を移し、隣国スウェーデンの建築家アスプルンドを意識しつつ、さらに遠いヨーロッパにも目を向けて、勃興していたモダニズムを熱狂的ともいえる態度で取り入れようとしていた。

◆2つの自邸の役割：

ショーピースとして、隠れ家として

アールトは1933年にアイノ夫人とともにヘルシンキに移り、首都での活動を始める。その最初に仕上げたのが郊外ムンキニエミ地区のアールト自邸とスタジオ(1935-36)で、設計事務所も併設されて彼の活動拠点となった。多くの顧客が自邸の方にも招き入れられ、ここはアールト作品の何たるかを見せるためのショーピースとして役割を果たしたようである。戦後になって近くにアトリエ・アールト(1954-55,1962-63)も完成したが、アールト自身はこの自邸を愛し、簡単な仕事は引き続きこちらで行ったという。全体構成の点でもマイレア邸へと発展してゆく性格の萌芽が見られ、一般に“アールトラしい”と言われる建築と空間がここからスタートしている。

のちにアールトは、もう一度自邸を作る機会を得た。セイナツァアの役場(1949-52)のいわば副産物として生まれた、自然に埋もれたアールトの夏の家(コエ・タロ)(1952-54)である。実験住宅としての役割を与えられているが、実際は文明から隔絶された環境にある点こそが特徴といえよう。再婚したばかりのエリサ夫人との安らぎの場として、隠れ家のような秘められた匂いの漂う住宅である。ごく親しい友人のみがこのサ

マーハウスに引き入れられたといい、ヘルシンキの自邸と対照的な究極のプライベート空間としての性格が強い。

2つの自邸はアールト死後も長らく非公開だったが、1990年代にアールト財団の管理下に入り相次いで公開された。

◆大企業への協力：

自然との共生、社会改革の理想

アールトの住宅作品には、製材・製紙系大企業の地方拠点に建てられた、現地マネージャーやエンジニアの家が実はかなり含まれている。有名な作品は少ないが、多くが深い森の中に立地していた点には注目したい。こうした作品の経験を通じて、アールトは建築と自然の共生に対して意識を深めてゆくのである。

1930年代から始まったアールトのモダニズムは、特にその初期には社会改革思想に共鳴した高い理想によって裏づけられている。大企業と協力して、工場建築に近代のダイナミズムを表現する一方で、そこで働く労働者のための住環境整備にも積極的に取り組んだ。スニラ製紙工場(1937-38,1950-53)と、それに隣接した住宅地(1937,1938,1947)はその十全な実現例と言え、特に住宅地は地域暖房、給湯、上下水道などが早くから完備されていた。同じ敷地のスニラ製紙工場 管理者の家(1936-37)や、タンペラ製紙工場 主任技術者の家(1937)も、アールトが戦前に取り組んだ実現例である。

戦後では、アールストレム社 現地管理者の家(1946)が、彼がおもに戦中にフィンランドやアメリカで研究を深めた「A-ハウス」あるいは「AA-システム」と呼ばれる企業職員用の規格化された独立住宅案を適用した例として知られる。1940年代までのアールトが量産住宅のあり方も重要テーマとしていたことは、もっと知られてもよいだろう。一方、エンソ・グートツァイト社 管理者の家 B棟(1959-60)及びC棟(1959-64)は、戦後

のアールト円熟期の作品で、自在な空間構成や造形が際立っている。

◆資産家からの依頼：

柔らかなモダニズムへの到達

アールトは、立地面からも資金面からも制約を受けないという条件に恵まれた住宅も、生涯にいくつか手がけている。アールストレム社の経営者ハリーとマイレ・グリクセン夫妻のために、社の本拠地ノールマルックに用意されたマイレア邸(1938-39)がその例となる。夫妻は、アールトに多くの工場建築や労働者住宅地の仕事を依頼したばかりでなく、彼の家具を販売する目的で1935年に設立されたアルテック社にも出資し、仕事上の関係を越えた友人であり、かつ頼りがいのあるパトロンでもあった。マイレア邸は、アールトの住宅アイデアのすべてを注ぎ込んだ作品として完成し、20世紀モダニズム住宅の金字塔のひとつとなった。同じ時期の作品には、傾斜しながらうねる木の壁が有名なニューヨーク万国博覧会フィンランド館(1938-39)もある。いずれも、アールトがモダニズムの堅苦しさから自由になり、自己表現を確立したことを雄弁に物語る作品である。

戦後になってからは、やはり恵まれた条件の下、フランスのイル・ド・フランス地方にメゾン・カレ(1956-61)が建てられた。現代芸術の理解者だった富裕なフランス人画商ルイ・カレのための住宅で、丘の上の大きな片流れ屋根が目立つ外観は、フィンランド国内の住宅作品には類例がない。しかし、特徴的な天井の断面形によって生み出された内部空間の流動性や、木を生かしたインテリアの暖かさは、マイレア邸につながる性格も有している。

メゾン・カレと同様に絵画コレクションを展示するスペースが中心をなすアホ邸(1964-65)も、豪華な住宅のグループに属する。共通しているのはその空間の柔らかさであろう。これらの住宅が生み出されたのは戦後のアールトの活動でもっとも実り豊かな時期であり、他にもオタニエミ工科大学本館(1949,1955

-66)、ヴオクセンニスカの教会(1956-58)、セイナヨキ市庁舎(1958,1959-65)などもこの頃の作品である。

◆晩年に：友人たちへの贈り物

1960年代後半以降のアールトは、ロヴァニエミの図書館(1961-68)のような以前から継続した仕事は別として、新たな大規模作品に着手する機会が少なくなる。首都ヘルシンキにあるフィンランディア・ホール(1962,1967-71,1973-75)が、この時期の唯一の大作ということになる。そうした中でアールトは、住宅の分野でもごく限られた作品にのみ取り組むようになる。古くからの友人たちの願いによって設計されたオクサラの夏の家(1965-66,1974-76)、コッコネン邸(1967-69)、シルツ邸(1969-70)などがその例である。いずれも簡素ながら闊達に、住人の性格や好みに合わせた住まいが形作られている。70歳近いアールトが最後に到達した、形式にとらわれることのない自由な境地と言えよう。

④いくつかの疑問や着目点

◆周辺地域への目

本国フィンランドで、アールトや彼の作品はいわばニュートラルな立場から再評価することができる時代となった。それは当然、日本からのアールト評価にも関係してこよう。ただしここで、私としてあくまでもこだわっておきたい点がある。国民的英雄、あるいは逆に敬して遠ざけるべき存在、といった固定観念を捨てて偏りのない自由な見方が許されるようになったことは歓迎されるとしても、それがアールトを「グローバル」な視点で評価することにつながってはならない。あくまでも「フィンランド」という固有の与条件に照らして扱うべきだと考えるのが私の立場である。「フィンランドのモダニスト」であることが、決して見落とすことのできないアールトの立脚点だからである。以下の本人の言葉は、大変示唆的であると常に思っている。

「……私はフィンランドで建てたい。そう、フィンランドで建てるのが好きなのです。これは自然な感情的な動機によるばかりでなく、私がフィンランドの建築的問題を最もよく知っているということにもよるのです。同時に、私は私が国際的であると感じますが、国際主義が唯一の正しいアプローチであるような人とは違ったふうにです。もし、バックグラウンドを形成するもの、地方に根ざしているものを欠いたとすれば、それは空虚な話です。」(1972年7月の本人へのインタビュー／引用は『アルヴァ・アールト作品集』第3巻より)

建築家に適用される評価軸はアールトに対しては当然フィンランドだが、他にもそれぞれの国あるいは固有の地域に即した評価軸を必要とする建築家たちがいる。そうしたいわば「周辺地域のモダニストたち」を見つめる視点を、われわれは失ってはならないであろう。

◆アールトの活動の舞台

フィンランドという与条件とは、つまりアールトの活動の舞台のことである。彼の個性あるいは才能について云々するばかりではなく、彼の活動の舞台を具体的に検討して、本人に及ぼした影響を見定めることが作品評価には必要となる。そして、実際に私が着目したいのは以下のような彼の舞台である。

○アールトの活動の舞台としての「都市」、そしてその向こうに見えるヨーロッパ<モダニズムの受容と地域化>…タンメカン邸・アールト自邸

○アールトの活動の舞台としての「自然」、そしてそこに実在するフィンランド<モダニズムの深化と個人化>…マイレア邸・森の中の小住宅

次回以降の連載ではこうした問題を個々に取り上げて、現在の視点からのアールトの位置づけを試みてゆく予定である。(続く)